

人格の二面性測定の試み

—NEGATIVE 語を加えて—

桑 原 知 子*

AN APPROACH TO MEASURE THE "TWO-SIDEDNESS OF PERSONALITY":
The revision of "Two-Sided Personality Scale"

Tomoko KUWABARA

A new personality test (TSPS) to reveal the "two-sidedness of personality" was constructed by Mori (1983). In the first scale (FIG. 1), one may check both sides of antonym independently. All items were selected to have positive meaning (P). The purpose of this study was to revise TSPS by including negative items (N) to allow a wider study of "two-sidedness", and to examine the tendency of subject's over-stressing desirable traits. It was designed in order that each corresponding "P" items and "N" items had the same meaning and had the difference only in the desirability of the items. 713 students serving as subjects were asked to rate revised TSPS. The result showed that: (1) The figure of "two-sided" person had the difference between "P" and "N". "Two-sided" person in "N" showed a tendency of introversion more than in "P". (2) Two types of "self acceptant" person: High- $S_+(P)$ and Low- $S_+(N)$ were differentiated. Low $S_+(N)$ was adaptable, but not positively. (3) $S(P-N)$ and $S_+(N)$ had the relation to L, K scale (MMPI). In conclusion, the significance of "N" aspect of revised TSPS was ascertained.

Key words: personality test, two-sidedness of personality, contradictory components, social desirability, desirability of traits.

問 題

人格は、一言で規定するにはあまりに複雑な存在である。上田 (1969) は、"人格内には全く相反する 2 個以上の特性が相互に拮抗し、人格をしてこれら諸力の均衡のうえに成立せしめる。こうした自己矛盾がたとえ二律排反的両極性をあらわしているとしても、これに弁証法的統一を与える人格要因の厳存するかぎり、人間は破局に陥ることはない"としている。人間を矛盾・対立を含む多元統一体としてとらえる見方は、Maslow (1962)、岡本 (1962) などにも認められる。一方、Jung (1921) は、意識の態度に対して無意識の態度を考え、この両者が補償的關係にあるものと考えた。たとえば、意識の態度が外向的な人は、無意識の態度は内向的であって前者

が強調されすぎる際には、後者が補償的に働くのである。ところが、この Jung の考え方に基づいているとされる淡路・岡部式向性検査では、内向性と外向性は一次元上の両極と考えられ、二律排反的であって、Jung (1921) のいう補償的關係への視点が欠けている。

このように、人格理論においては、人格を、対立を含んだダイナミックなものとして捉えようとする観点がみとめられるのに対して、人格測定の分野においては、そういった観点がみすごされてきた。正木 (1936) は、自己診断の諸検査に対し、"自己の相対する性質がうかがふ時、自己を何れとも診断し得ず、疑問符を付することがある"としており、続 (1953, 1954) は、向性検査における無応答は単に、中間としての意味をもつだけでなく、多義的であることを示している。人格の中の対極的な側面は、従来の測定方法によっては表現しえず、わずかに、疑問反応、無応答などに潜在的に表現されていたものと

* 京都大学 (Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Kyoto University)

考えられる。ただ、ロールシャッハテストにおいては Rorschach (1921) の“内向と外向とを生ずる心理的過程は対立的ではなく差異的である”との考えを反映して、“両極型”あるいは“両貧型”と名づけられたタイプが設けられており、そこでは、外向と内向とが二律排反の関係になっていない。また、人間の中の対立のうちの1つである男性性・女性性について、最近アメリカで、Psychological Androgyny (心理学的両性具有性) の研究が盛んにおこなわれているが、Bem (1974) の作成した BSRI (Bem Sex-Role Inventory) は、男性性・女性性を一次元上の両極ではなく、それらを独立な次元としてとらえようとした初めての試みである。このように、ロールシャッハテストにおける体験型の理論及び BSRI においては、人格内の対立的な側面への視点が導入されている。

森 (1983) は、質問紙法によって測定可能な——従って意識することのできる——人格の両極的な側面を“人格の二面性”とよび、それを数量的に測定しようとするような評定尺度を作成した。作成された尺度 (TSPS, Two-Sided Personality Scale の略) は FIG. 1 に示されるような測定形式を持ち、これによると、相反する形容詞対に対して、独立に評定でき、FIG. 1 の例に示されるように“やさしい”に対して“かなりあてはまる”、“きびしい”に対して“少しあてはまる”といった評定のつけ方が可能となっている。“二面性”を測るスコアとしては、左右の対の評定点についてその差の絶対値をとり、(FIG. 1 の例の場合 $|5-4|=1$) それをこの尺度を構成する30対について合計したものとしている (これを $S_{\pm}$ とよぶ)。また30対60項目の評定点を合計したスコア (これを $S_{\pm}$ とよぶ) も設けてある。この TSPS を実施した結果より、質問紙法によって人格の“二面性”の抽出が可能であることが確認された。また、二面性を示すとされた群は、情緒的安定性にすぐれることが示唆された。

ところで、TSPS は、その項目がすべて望ましい意味をもつ語 (Positive 語、以下 P と略) であるという特徴をもつ。これは、望ましい語ほど意識内にとりこみやすく、

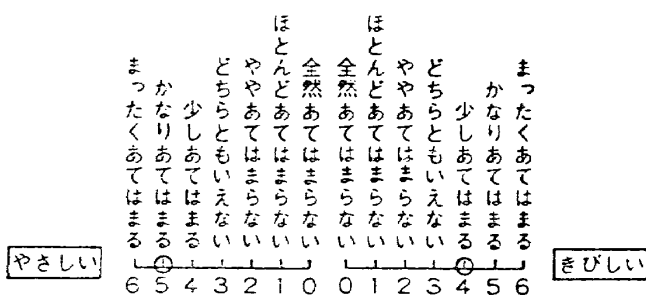


FIG. 1 TSPS の測定形式

たとえ相互に矛盾するものであっても意識内に共存している可能性が大きいと考えられ、従って“二面性”を抽出するには、Pの方が容易であると考えられたためである。ところが項目がすべてPであるために、以下のような問題点が生じてくると考えられる。

(1) 性格表現用語は、青木 (1971 a, b) が示したように、ある程度一定の、“望ましき”をもつ。従って望ましき基準として、性格表現用語を望ましい意味をもつ語 (P) と、望ましくない意味をもつ語 (Negative 語、以下 N と略) に二分することができる。その点から考えると TSPS は、Pのみから成り立っており、人格を表現しようとする際に、片面だけしか表現し得ないという制限をうける。

(2) Edwards (1953) は、ある項目の社会的望ましきの尺度値と、それを個人が所有するとする反応との相関は、.871と高いとしている。従って、ある項目への反応が、真に項目特性を所有するとしているのか、あるいは、項目のもつ望ましきに反応しているのかそのいずれであるかは決定し難い。従って、TSPS においても、PのみではなくNもいれて“自己を望ましくみせようとする構え”の影響を検討しておく必要がある。

そこで、本研究においては、新たにN項目を作成し、以下の点について検討を加える。

(1) “望ましき”という点からとらえた時の、人格の二側面を抽出しうるか。すなわち、N項目を付加することに意義が認められるか。また、新たなN側面における S_{+} や S_{-} は、どのような人格特徴を示すものであるのかという諸点について検討する。

(2) MMPI における L 尺度、K 尺度のような、自己を望ましくみせようとする構えをチェックできるようなスコアを、TSPS に設定する。そして、はたしてその新しいスコアが L、K 尺度的な役わりをはたしうるかについて検討し、自己を望ましくみせようとする構えの混入について明確にすることを試みる。

以上、本研究は、望ましきという点からみた時の人格内の二側面を表現しうるよう、TSPS に新たにN項目を加え、その特徴、意義を明らかにすること、及び、自己を望ましくみせようとする構えの、反応への混入について明確にすることを目的とする。

方 法

新たな尺度の作成

新たにN項目をつけ加えるが、その際、望ましきだけの要因をぬきだすことが可能であるように、これまでの TSPS の項目 (P) と、意味的には同一であって、望ま

しさの数値だけが異なる語を選択した。たとえば、Pである“話し好きな”という項目に対しては、それとほぼ同意語であるが、望ましくない意味をもつ“おしゃべり”を選定した。従ってNの選択にあたっては、(a)望ましくない意味をもつ語であること、(b)Pと類義語であること、さらに(c)Nにおける対語は対立概念として妥当であることが考慮された。項目作成は以下の手続に従って行われた。

(i) 語の収集 質問紙によって、TSPSの各項目(P)と、それぞれ“類義語”で、かつ“自分にとって望ましくない意味をもつ語”を思いっただけあげるようにという指示により、語の収集を行った。——調査④ また文献(青木 1971a, 1971b, 1972, 1973)や類語辞典、反対語辞典、国語辞典などを参考に筆者が選んだ語も加えた。

(ii) 類義語評定 (i)で得られた語の中から、筆者があらかじめPの各項目毎にそれぞれ6個ずつ、あげられた頻度の多い順に選んだ。そのうえで、類義語として適当なものを3個ずつ選択させた。——調査⑤

(iii) 対立概念妥当性 (ii)で選ばれた語について、Pの各項目毎に数の多いものから3～4個をあげ、Nの項目群から選定された。そして次に、その中からPの各対ごとに、Nの対を3対ずつ候補として作成した(筆者と他の1名との2名協議による)。そして作成された各対について、それが対立概念として妥当であるかについて“妥当である”“まあまあ妥当である”“妥当でない”の基準で評定させた。——調査⑥ これによって、対立概念妥当性が最も高いもの、あるいは50%の被験者が妥当と認めた対のうち適当だと思われるものを筆者が選んだ。このようにして、P 30対に対応したN 30対を選定した。なお調査④⑤⑥とも被験者は心理学専攻の大学院生で④28名(男14女14)⑤20名(男10女10)⑥27名(男15女12)である。

PとNとは交互になるよう配列されたが、対応するPとNの対(たとえば“口数少ない—話し好きな(P)”と“むっつりした—おしゃべり(N)”)は、近くにこないようずらせて配列した。従って被験者は、同じ意味のことをPとNとの2通りでかかれていていることについてはわからないようになっている。

次にスコアについては、TSPSで設けられた S_+ 、 S_- をそのままN項目にも採用し、Pに関するスコアに(P)、Nに関するスコアに(N)をつけて、 $S_+(P)$ 、 $S_+(N)$ 、 $S_-(P)$ 、 $S_-(N)$ を定めた*。さらに、 $S_+(P)-S_+(N)$ を $S(P-N)$ と表わし1つのスコアとした。このスコアが大きいと自分を望ましく思う傾向が強く、小さいと自己否定的であると考えられる。またこのスコアはMMPI

におけるL尺度、K尺度と関連をもつと予想される。

調査手続

調査1 新しく作成されたN項目の特性、意義を明らかにするために、国立大学、私立大学、私立短大の学生713名(男374, 女339)に対して、TSPSにN尺度を加えた新たな尺度(以下TSPS-IIとよぶ)を実施した。

調査2 MMPIの中のL尺度、K尺度とTSPS-II、特に $S(P-N)$ とがどのような関連性をもつかという点を検討するために、私立大学学生56名(男37, 女19)に対して、TSPS-IIとあわせて、MMPIを実施した。

結 果

調査1

得られたN項目に関する結果を、Pとの比較によって以下に示す。

全項目平均反応分布 FIG. 2に示したように、P、Nともに、最も度数の多かったカテゴリーは“4. 少しあてはまる”であり、PとNとで同様の結果が得られた。ただ項目別平均値は、PとNを比較してみると、60個のうち54個の項目においてNの方が低かった。

反対順位 森(1983)において明らかにされたように、各対間の相関関係について負相関の高い順に並べて得られる反対順位は、被験者によらず恒常的に得られる。本研究におけるPの順位も森(1983)とほぼ同じであった(TABLE 1は、Pの反対順位の高い順に、全対を呈示したものである。対間の相関係数もあわせて示した)。Nに関してもPと対応した反対順位になることが期待された。全体的

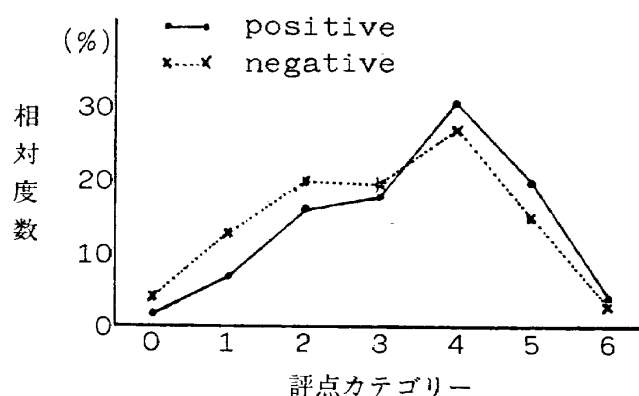


FIG. 2 全項目平均反応分布

* ある人が、1人の人間のうちにもともと共存しやすい対(共存性項目5対、TABLE 1に示す)の双方にあてはまるとつけたとしても、そのことが必ずしも二面性を示すとはいえないと考えられる。従って、本研究においては、 S_- の計算の際、共存性項目5対を省き、P、Nそれぞれ25対について計算した。 S_- の小さいことが二面性の存在を示す点については、森(1983)と同様である。

TABLE 1 POSITIVE,NEGATIVEの対, 及びP, N間, 各対間の相関係数

対間 相関 係数		P N間 相関 係数		対間 相関 係数		対間 相関 係数		P N間 相関 係数		対間 相関 係数
*Op. -.60	口数少ない 話し好きな	.52 .61	むっつりした おしゃべり	-.49 Op.	-.24	クールな 人情に厚い	.32 .45	情がうすい 情に流される	Op. -.45	
Op. -.47	てきばきした おっとりした	.33 .48	せかせかした ぐずぐずした	-.19	-.24	ロマンチックな 現実的な	.38 .49	現実離れた 実 利 的	-.33	
Op. -.45	世話好き 人に干渉しない	.63 .36	おせっかい そっけない	-.30 Op.	-.22	冷 静 な 情 熱 的	.27 .50	さ め た 激しやすい	-.20	
Op. -.41	男 性 的 女 性 的	.58 .28	{ 荒々しい(男性用) 男まさり(女性用) なよなよとした	-.30 Op.	-.19	古 風 な 現代的な	.41 .44	因襲的な 新しがりやの	Co.** -.10	
Op. -.40	それとなくいう 単刀直入	.43 .54	もってまわっていう ズケズケいう	-.27	-.19	しぶとい あっさりした	.45 .06	執念深い なげやりな	.05	
-.40	陽 気 な もの静か	.49 .43	さわがしい 陰 気 な	-.35	-.18	分 析 的 直 観 的	.45 .21	理くつつばい 非論理的	-.38	
-.40	太っ腹な デリケートな	.47 .49	ずぶとい 線の細い	-.38 Op.	-.18	のんびりした エネルギーな	.30 .42	怠 慢 な がむしゃらな	-.16	
-.40	融通がきく 一本 気	.22 .45	迎 合 的 がんこな	-.28	Co. -.18	執着する 臨機応変の	.41 .23	こだわる 場あたりの	Co. -.14	
-.36	社 交 的 孤独を好む	.43 .39	八方美人 人づきあいの悪い	-.30	-.16	淡々とした 熱中する	.22 .21	無感動な のぼせやすい	-.21	
-.33	気が強い おとなしい	.45 .44	我がつよい 気の弱い	-.17	Co. -.13	実 際 的 理 論 的	.38 .26	実 利 的 頭でっかち	Co. -.14	
-.32	大 胆 細 心	.38 .40	むこうみずな 小 心	-.14	-.13	あきらめのよい ねばり強い	.14 .22	粘りのない しつこい	-.25	
-.29	指 導 的 従 順	.57 .64	支 配 的 追 従 的	-.29	Co. -.10	自 立 的 協 調 的	.23 .25	独 断 的 付和雷同	-.16	
-.28	気 軽 な 慎 重 な	.21 .15	軽 率 な 思いきりの悪い	.13	Co. -.08	用心深い のんきな	.40 .42	うたがい深い ぬ け た	Co. -.04	
-.27	おおやかな 厳 格 な	.22 .31	ルーズな しゃくし定規な	-.29	Co. -.06	茶めつけのある 大人っぽい	.27 .18	幼 稚 な ひ ね た	Co. -.03	
-.26	勇 猛 な おっとりした	.39 .21	野 蛮 な 温室育ち	-.29	.25	話しじょうず 聞きじょうず	.73 .14	口じょうず 聞いてばかりの	-.43	

*Op. 対立性項目 (1人の人間のうちに共存しにくい対)

! **Co. 共存性項目 (1人の人間のうちに共存しやすい対)

にみると、Pの反対順位とNの反対順位とは $r_s = .4147$ ($p < .05$) で、有意な正の相関を示した。森 (1983) において対立性項目 (1人の人間に共存しにくい対) と共存性項目 (1人の人間に共存しやすい対) とが、それぞれ5対ずつ

* 森 (1983) において、反対順位の高いものから5対、低いものから5対を、意味的にカテゴリーに偏りのないよう選択し (従って、必ずしも相関係数の順に選ばれてはいない)、前者を“対立性項目”、後者を“共存性項目”と名づけ、それぞれ1人の人間に共存しにくい対、しやすい対と考えられた。

設定されたが*、本研究において改めて、P, N独自に5対ずつが設定された (それぞれはTABLE 1に示されている)。

P, N間の相関 TABLE 1には、また、P, N項目間の相関係数も同時に示した。P, Nは、作成時その意味内容は同じで、望ましさの程度だけが異なることが理想とされたので、P, N間の相関係数は正相関をもつことが期待される。結果は“あっさりした”と“なげやりな”以外は0.1%水準で有意に正の相関がみられた。

スコア間相関 各スコア間の相関係数を、TABLE 2

に示す。 $S_+(P)$ と $S_+(N)$, $S_-(P)$ と $S_-(N)$ など同種のスコアは、いずれも有意な正の相関を示している。 $S(P-N)$ は、 $S_+(P)-S_+(N)$ によって算出されるので、 $S_+(P)$, $S_+(N)$ の両者と相関をもつことは明らかであるが、相関係数の絶対値が $S_+(P)$ の場合、 $|r|=.50$, $S_+(N)$ の場合 $|r|=.70$ であり $S_+(N)$ の方が高かった。

スコアの平均値 各スコアの平均値を TABLE 3 に示す。 S_+ のスコアについては、 P の方が N よりも平均値が有意に高かった ($t=18.66$, $df=712$, $p<.001$)。 S_- のスコアについては、 P の方が有意に低かった ($t=-8.32$, $df=712$, $p<.001$)。TABLE 3 には、 $S(P-N)$ の Range もあわせて示した。 $S(P-N)<0$ の者すなわち $S_+(P)$ より $S_+(N)$ の方が大きい被験者は 713 名中 151 名 (21

%) であった。

スコアと項目との関係 次に、スコア (S_+ , S_-) と項目得点との関係の分析も行った。分析は、スコアと各項目との相関係数を算出する方法と、各スコアの値より、大中小の 3 群にわけ大群と小群の項目別平均値を比較する方法との 2 通りの方法で行った。両者の結果には大差がなかったので、TABLE 4, TABLE 5 には、群別の平均値と t 検定の結果の一部を示した。

まず、 $S_+(P)$ は、当然多くの P 項目において、 $S_+(P)$ 大群の方が、有意に平均値が高かったが、なかでも活動性、社会的外向性を示す項目において、 $|t|$ が高かった。

$S_+(N)$ は、情緒的不安定をあらわす項目において $|t|$ が高いが、“なげやりな”と“執念深い”など、対立する項目が並んで上位にあがっていることが注目される。 $S_+(N)$ 小群は、“冷静な”“聞きじょうず”で示されるようなタイプで、自分から口を開くことなくうまくやっていくタイプといえるかもしれない。二面性スコアに関して、 P , N とも、一面的な群は情緒不安定を示す項目における得点が高かった。二面的な群については、 P , N で重なりが認められるものの、やや異なった項目において、平均値に差がみられている。すなわち、 P 二面性群は情緒的安定性を示す項目に高得点であり、それに対して N 二面性群は、どちらかというと、社会的内向性を示すと考えられる項目の得点が高く、 P , N で、二面性群の示す特徴は微妙に違っていたといえる。

調査 2

各スコアの得点より、大中小の 3 群にわけ、大群と小群について、MMPI の L , F , K 3 尺度の得点平均値を比較した。それぞれの群の平均値, SD および t 値を

スコア別に TABLE 6 に示す。まず、 L (虚構点) について、 $S(P-N)$ 大群, $S_+(N)$ 小群が有意に高かった ($t=4.11$, $df=38$, $p<.001$ 及び $t=-3.07$, $df=40$, $p<.01$)。これは K についても同じ結果が得られたが、 $S(P-N)$ においては、傾向を示すにとどまった。一方、 F については、 $S(P-N)$ 小群が有意に ($p<.05$) 高かった他、 $S_+(N)$ 大群, $S_-(N)$ 小群が高い傾向を示した。なお、 $S_+(P)$, $S_-(P)$ のスコアについては、3 尺度ともに有意差がなかった。

考 察

1. N 項目の特性・意義について

TABLE 2 スコア間相関

	$S_+(P)$	$S_-(P)$	$S_+(N)$	$S_-(N)$	$S(P-N)$
$S_+(P)$	—				
$S_-(P)$	-.18***	—			
$S_+(N)$	.28***	.02	—		
$S_-(N)$	-.01	.76***	-.02	—	
$S(P-N)$	.50***	-.16***	-.70***	.01	—

*** $p<.001$

TABLE 3 各スコアの平均, 標準偏差

	MEAN	SD	
$S_+(P)$	205.7	22.6	$t=18.66***$
$S_+(N)$	184.6	27.3	
$S_-(P)$	43.3	13.5	$t=-8.32***$
$S_-(N)$	46.3	14.2	
$S(P-N)$	21.1	30.3	Range -83~+122

$N=713$ *** $p<.001$

TABLE 4 スコアと項目との関係 (S_+)

項 目	$S_+(P)$ 平均値		t	項 目	$S_+(N)$ 平均値		t
	大群 (肯定)	小群 (否定)			大群 (否定)	小群 (肯定)	
エネルギーな	3.9	2.5	-12.70***	軽 率 な	4.0	2.4	-13.73***
指 導 的	3.8	2.2	-12.69***	なげやりな	3.6	2.1	-12.51***
気 が 強 い	4.2	2.7	-11.82***	執 念 深 い	4.0	2.6	-12.30***
勇 猛 な	3.3	2.0	-11.76***	し つ こ い	4.0	2.5	-11.86***
てきぱきした	3.8	2.5	-11.25***	現実離れた	3.9	2.5	-11.66***
⋮				⋮			
人づきあいの悪い	2.2	2.7	3.67***	冷 静 な	3.2	3.7	4.35***
陰 気 な	2.1	2.6	3.53***	聞きじょうず	3.4	3.8	3.76***
小 心	3.3	3.7	3.45***	ねばり強い	3.5	3.9	2.75**
粘りのない	2.6	3.0	3.44***	陽 気 な	4.0	4.2	2.22 *
気 の 弱 い	3.2	3.6	3.35***	融通がきく	3.3	3.6	2.21 *
⋮				あっさりした	3.4	3.7	2.11 *

*** $P<.001$

** $P<.01$

* $P<.05$

TABLE 5 スコアと項目との関係(S-)

項 目	S-(P)平均値		t	項 目	S-(N)平均値		t
	大群 (一面群)	小群 (二面群)			大群 (一面群)	小群 (二面群)	
もの静か	2.7 < 3.4		4.71***	陰気な	2.0 < 2.6		4.45***
淡々とした	2.8 < 3.3		3.93***	口数少ない	2.4 < 3.1		4.26***
勇猛な	2.4 < 2.9		3.87***	おとなしい	3.0 < 3.5		3.72***
太っ腹な	2.4 < 2.8		3.72***	むっつりした	2.4 < 2.9		3.70***
クールな	2.8 < 3.3		3.70***	もの静か	2.9 < 3.3		2.90 **
厳格な	2.7 < 3.1		3.61***	情がうすい	2.0 < 2.3		2.76 **
口数少ない	2.5 < 3.1		3.40***	気の弱い	3.1 < 3.5		2.63 **
⋮				⋮			
温室育ち	3.8 > 3.3		-3.86***	熱中する	4.3 > 3.9		-4.10***
のほせやすい	3.7 > 3.3		-2.80 **	話しじょうず	2.8 > 2.4		-2.84 **
幼稚な	3.7 > 3.4		-2.69 **	聞きじょうず	3.7 > 3.4		-2.65 **
小心	3.7 > 3.3		-2.56 *	独断的	3.4 > 3.1		-2.64 **
熱中する	4.2 > 3.9		-2.55 *	のほせやすい	3.8 > 3.4		-2.60 **
激しやすい	3.6 > 3.3		-2.32 *	情に流される	3.9 > 3.6		-2.58 **
さわがしい	3.2 > 2.8		-2.25 *	温室育ち	3.7 > 3.3		-2.51 *
⋮				⋮			

*** P < .001

** P < .01

* P < .05

と S-(N) といった同種のスコアは正相関をもっている (TABLE 2)。

さらに, FIG. 2 に示されるように, Pと同じくNにおいても, もっとも度数の多かったカテゴリーは“4. 少しあてはまる”であった。たしかに, S₊(P), S₊(N) の平均値には有意差が認められ, 全体としてPの平均値の方が高く (TABLE 3), 被験者は, 項目の持つ望ましさの影響を受けていると考えられる。しかしながら, FIG. 2 をみると, その影響は, 最多カテゴリーを移動させるほどのものではなかった。

従って, 被験者は, P, Nという項目のもつ望ましさの要因もあるが, むしろそれ以外の要因 (項目のもつ‘意味’など) によって反応した部分が大きいと考えられる。

TABLE 6 各スコアとL, F, K尺度との関係

	S+(P)			S+(N)			S-(P)			S-(N)			S(P-N)		
	MEAN 大群	MEAN 小群	t	MEAN 大群	MEAN 小群	t	MEAN 大群	MEAN 小群	t	MEAN 大群	MEAN 小群	t	MEAN 大群	MEAN 小群	t
L	48.1	45.6	.87	40.8	48.6	-3.07**	43.6	46.6	-1.15	42.5	43.5	-.42	48.2	39.0	4.11***
F	46.7	47.0	-.12	53.8	48.4	1.75(*)	49.0	49.5	-.14	47.4	52.5	-1.73(*)	47.1	54.2	-2.27*
K	49.1	50.7	-.54	44.0	52.3	-3.01**	48.7	48.7	.01	48.8	45.9	1.14	49.9	44.5	1.99(*)

(*) p < .10

* p < .05

** p < .01

*** p < .001

本研究においては, これまでのP項目に加えて新たにN項目がつけ加えられたわけであるが, その特性, 意義を中心に, 以下に考察する。PとNは, その作成時において, 意味的には同じであって, その望ましさのみが異なるよう考慮された。従って, PとNとは, 望ましさという点においては対立的であるものの, 他の面においては類似していると考えられる。そこで, PとNとで類似している特性についてまず述べ, その後両者の差違について検討を加えたい。

a. PとNとの類似点 P, Nの対応した項目はほとんど, 有意な正相関をもったことにより, PとNとが類義語であるようにという, 作成時の意図は達せられたと考えられる。対間の相関係数に基づいた反対順位においても, PとNとは類似した結果が得られている。

また, スコアにおいても, S₊(P) と S₊(N), S₋(P)

b. PとNとの相違点 上述したように, P, Nの結果は類似したものも多かったが, 個別的にみていくと相違点が認められる。以下, Pとの比較によりNの特性, 意義を明らかにしたい。

まず, S₋のスコアについて, Pの方が平均値が低かった。これは, Pにおける方が, Nと比較して, より二面的につけたことを示す。しかし, それにもかかわらず, Nにおいても二面的につける者も存在しており, 従ってPの二面性をもつ群と, Nの二面性をもつ群は, 共通性とともに (S₋(P) と S₋(N) とは正の相関をもっている) 異なったパーソナリティーを抽出する可能性が考えられる。TABLE 5 に示されたように, P二面群は, 情緒的安定性にすぐれ (“もの静か” “淡々とした”), 一方で “勇猛な” “太っ腹な” という特性を有している。それに対して, N二面群は, “陰気な” “口数の少ない” “おとなしい”

といった、社会的内向性に傾いた特性を多く示している。従って、P二面群とN二面群とは異なったパーソナリティ特性を有すると考えられるので、N項目の設定に意義があるといえるだろう。

次に、 S_+ について、TABLE 4よりみられるパーソナリティー像は、PとNとでかなり異なっている。さらに、 $S_+(P)$ 大群（自己肯定）と、 $S_+(N)$ 小群（自己肯定）とは、“自己肯定的”という点においては、同様であると考えられるのだが、その示す像はかなり異なっていた。 $S_+(N)$ 小群は、“悪いとはいえない”というかたちでの自己肯定であり、“消極的自己肯定型”、一方、 $S_+(P)$ 大群は“積極的自己肯定型”と名づけられるかもしれない。従来の検査においては、この両者は区別されていなかったが、PとNとで独立に測定する必要があることが示されたといえるだろう。

以上あきらかにされたように、 S_+ 、 S_- いずれにおいても、N項目設定に意義があると考えられた。

2. “自己を望ましくみせようとする構え”について

1-a. に示されたように“自己を望ましくみせようとする構え”は、それが回答の妥当性を否定するものではないと考えられるものの、たしかに存在している。そこで、それを数量的に検出しようとするスコアを検討する必要がある。L、K尺度との比較により、 $S(P-N)$ が、これらの尺度と正相関をもつことが示されたので、 $S(P-N)$ の数値が高いことは、望ましくみせようとする構えと連関があると考えられる。また、 $S_+(N)$ 小群も同じ傾向をもつ。ただ、 $S(P-N)$ にくらべて、 $S_+(N)$ 小群の方は、よりK尺度と強い連関をもっており、両者に少し差が認められる。一方、 $S_+(P)$ 大群はこういった傾向が認められず、“積極的自己肯定型”ではなく“消極的自己肯定型”の方が、自己を望ましくみせようとする構えと連関をもっていると考えられる。ところで、MMPIのL尺度の前提は“理想的には好ましいが実際上ありえないこと”となっている。TSPS-IIの場合、ある人がうまく適応していれば、 $S(P-N)$ はむしろある程度大きい数値をとり、決して“ありえない”ことではない。従って、 $S(P-N)$ の数値が高いこと、 $S_+(N)$ の数値が低いことは、自己を望ましくみせようとする構えと連関があるものの、断定はできず、むしろ適応を示すサインであったり、低不安を示すサインである可能性が強い。ただ、極端な数値をとる際には、前述の構えによるものと判断しようと考えられるので、今後具体的な数値について検討していく必要があると考えられる。なお、 $S(P-N)$ が負の数値をとった者（ $S_+(P) < S_+(N)$ であった者）も全体の21%存在した。そして、こういった群

は、F尺度得点が高かった。F点が高いと検査の信頼性が乏しいと解釈されるのであるが、本研究の場合はむしろ、“被験者が自分を好ましくない方向に表わそうとする傾向を示したり、あるいは自由で個性的な人格をあらわす”（阿部、1969）という、F尺度の別の側面の解釈が当てはまると考えられる。

3. N項目を含んだ TSPS-II の特性について

本研究において作成された、N項目を含む TSPS-II は、以下に述べる三側面をもつと考えられる。

第1に、パーソナリティーテストとしての側面をもつ。各被験者があてはまったとする形容詞をもとにパーソナリティー像を想定することができる。従来の検査と異なり、“人格の二面性”を考慮している点に独自性をもつ。N項目を加えることによって、P、Nという人格の二側面を網羅することが可能になったと考えられる。

第2に、人格の二面性の程度を測定する尺度としての側面をもつ。二面性について数量的に測定しよう。N項目を加えることによって、Pにおける二面性とは異なった、Nにおける二面性の特徴を抽出することが可能となった。さらに、P、Nは、これも1つの人格内の対立と考えられるので、人格の二面性の一側面としてとらえる。従って、“やさしい—きびしい”といった二面性とはまた異なった側面における二面性についての情報を与えうるともいえるだろう。これまで、“望ましき”については、議論は多くなされてきたものの、積極的に考慮されてはこなかった。

Edwards (1953) の作成した EPPS は、望ましきに対する統制が加えられている数少ない例である。しかし、望ましきに対して統制を加えるだけでなく、一歩進んで、自己を望ましく見せる人、逆に望ましくなくみせる人などを1つのタイプとしてとらえ、望ましきへの反応から性格特徴を明らかにしていくことが可能であるし、また必要なのではないかと考えられる。

第3に、TSPS-II は、自己受容度の尺度としての側面をもつ。 $S_+(P)$ 、 $S_+(N)$ 、 $S(P-N)$ などの尺度によって、自己肯定度を知ることができる。本研究で明らかになったように、同じように自己肯定的であっても、P項目にあてはまるとする者と、N項目にあてはまらないとする者とはかなり異なったパーソナリティー特徴をもつ。従来の自己受容尺度は、自己受容状態を肯定的評価（本研究でいえば、P項目にあてはまる）の方向のみからとらえており、こうした差を抽出することは、困難であったと考えられる。

以上のように、N項目は、P項目に対して単にその測定領域を広げたのみならず、異なった側面でのパーソナ

リティーの抽出を可能とした。これは、項目のもつ望ましさを、単に項目への回答を歪めるものとしてとらえるのみならず、より積極的に、性格特性の1つとしてとらえていくことに意義があることを示唆していると考えられる。

要 約

森(1983)は、人格の二面性に注目し、それを数量的に測定しうる尺度(TSPS)を作成した。しかし、TSPSは望ましい意味をもつ語(P)のみから成りたっており、望ましきという点からみた時、人格の片面しか表現し得ず、また、項目への反応が、真にその項目にあてはまっているとしているのか、あるいは項目のもつ望ましさに反応しているのかが不明であった。そこで、本研究においては、Pと意味的には類義語であるが望ましきの程度が異なる語(N)を加え、(1)N側面は、Pとどのように異なり、どういった特性をもつか、またNを加えることに意義が認められるか、(2)自己を望ましくみせようとする構えがどのように混入しており、それを明らかにするスコアを設定できるかという諸点について検討を加えた。

まず(1)については、P、N間相関、反対順位などの点についてP、N間の類似性が認められ、被験者が、項目のもつ望ましき以外の要因によって、項目への反応を行っている部分が大いことが示唆された。しかし、二面性を示すとされた群は、PとNとでその像が少し異なっており、Pは主に情緒安定性を示し、Nにおいては、社会的内向性への傾きが認められた。また、同じように自己肯定的であると考えられる、 $S_+(P)$ 大群と $S_+(N)$ 小群は異なったパーソナリティー像を示し、両者を区別していく必要性が示された。以上のように、N項目は、P項目に対してその測定領域を広げたのみならず、Pとはかなり異なった側面のパーソナリティーを抽出しうることが示され、N項目作成の意義がたしかめられたといえる。(2)次に、 $S(P-N)$ のスコア、及び $S_+(N)$ は、MMPIのL、K尺度と相関があり、このスコアが、“自己を望ましくみせようとする構え”を抽出する可能性が示された。しかし、 $S(P-N)$ が大いこと及び $S_+(N)$ が小さいことは、適応あるいは低不安と関連がある可能性も強く、数値が極端な場合のみ、この“構え”の影響を考えうるとされた。最後に、N項目を加えたTSPS-IIについて、パーソナリティーテスト、二面性テスト、自己受容度測定の三側面をもつこと、及び、いずれの側面においてもN項目の設定が意義をもったことが示された。

引用文献

- 阿部満洲 1969 日本版 MMPI ハンドブック 日本 MMPI 研究会(編) 三京房
- 青木孝悦 1971a 性格表現用語の心理-辞典的研究——455語の選択、分類および望ましきの評定——心理学研究, 42, 1—13.
- 青木孝悦 1971b 性格表現用語における個人的望ましきの因子分析的研究 心理学研究, 42, 87—91.
- 青木孝悦 1972 性格表現用語 580語の意味類似による多因子解析から作られた性格の側面 心理学研究, 43, 125—136.
- 青木孝悦 1973 性格側面57についての2, 3の研究——反意語, 言い換え語, 特性所有のタイプ——千葉大学人文研究, 2, 35—58.
- Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155—162.
- Edwards, A.L. 1953 The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endowed. *Journal of Applied Psychology*, 37, 90—93.
- Jung, C.G. 1921 *Psychological types*. London: Routledge & Kegan Paul.
- 正木 正 1936 自己診断の分析——人間の類型研究Ⅲ——心理学研究, 11, 38—59.
- Maslow, A.H. 1962 *Toward a psychology of being*. New York: Van Nostrand.
- 森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究, 54, 182—188.
- 岡本重雄 1962 生活心理学 朝倉書店
- Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik*. Bern: Ernst Bircher.
- 続 有恒 1953 質問紙調査法に関する研究Ⅱ 心理学研究, 24, 225—238.
- 続 有恒 1954 質問紙調査法に関する研究Ⅲ 心理学研究, 24, 299—309.
- 上田吉一 1969 精神的に健康な人間 川島書店

〈謝辞〉 この論文の作成にあたり御指導をいただきました京都大学教育学部 梅本堯夫教授、河合隼雄教授、坂野登教授に心から感謝いたします。また、調査の実施に際し、京都教育大学 一谷彊教授、京都大学教育学部 斎藤久美子助教授より貴重な御助言、御協力をいただきました。ここに記して厚く感謝いたします。

(1985年8月21日受稿)